

2. 大阪における明治20年代の展望所を持つ施設について

船越幹央*

1. はじめに

では、報告させていただきます。よろしくお願いします。

私の方は、画像はあまりないのですが、必要なところで若干投影しながら、お話ししたいと思います。資料は資料1～8まであります。今日の話は、一応タイトルを「大阪における明治20年代の展望所を持つ施設について」という、ちょっと回りくどいタイトルにさせて頂いたんです。この回りくどい意味はまた、追々お話ししたいと思っております。それで、今回こういう大阪の明治20年代、先程の東京の「凌雲閣」に若干先立つような展望施設については、既に研究もされていて、例えば『明治大正大阪市史』にも触れられていますし、『新修大阪市史』にももちろん触れられています。それから、資料4の参考文献の所にも挙げておきましたけれども、橋爪紳也さんなどが盛んに研究をされていて、ある程度のことは分かるんです。しかし、今回また、私なりに資料を見ただけですが、やはりジャンルがこういうジャンル、仮設的なものであるために、なかなかはっきりした資料がないということで、色んなことを確定させることが難しい面もあるのではないかと。そういうことで、今回、若干のご報告をさせて頂こうかなと思っております。

今日お話しするのは4つの施設なんですけれども、その資料1の2のところに書いていますが、明治21年7月に「眺望閣」、いわゆる「五階」と言っておるものが——先程の行吉さんの写真にも出てきましたけれども——できます。そして、翌22年に、これはあとでちょっとごらん頂きますけれども、純然たる塔的なものではないんですけれども、商業倶楽部というものが今宮村にできまして、そのすぐ後にキタにですね、「凌雲閣」——いわゆる「九階」と言っているものなんですけれども——できます。そして、同年9月には「浪花富士山」、先程画像をご紹介頂きましたけれども、そういうものもありまして、このわずか2年間に立て続けにこういう展望所が出来ているということになります。

2. 眺望閣（五階）

これを順番に追っかけて行きたいというふうに思っております。まず資料1の（A）として「有宝地眺望閣」というものなんです、これは「有宝地」という遊園地の中に建っていた「眺望閣」という建物なんです。まず場所を、どこにあったかということを見ていきます。図1に「眺望閣」の位置が示されていますが、大蔵省の米蔵があった辺りに当たるのではないかと考えています。今回も出している史料にもよりますし、先学が研究されているところもそうなんです。「大阪朝日新聞」明治21年4月18日に「眺望閣」という紹介記事が出ていますけれども、これによるとその位置としては、「西成郡今宮村字関谷

* 大阪歴史博物館 学芸員

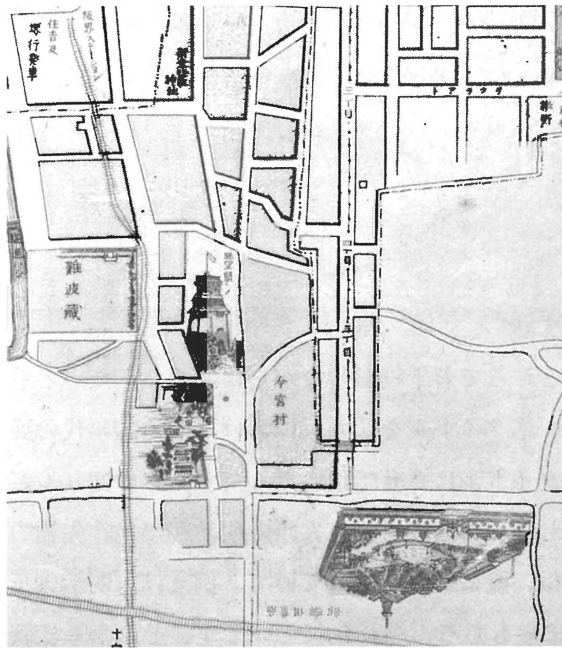


図1 眺望閣付近地図（「新鐫大阪市街細見図」
青木嵩山堂、明治24年）

といふ地に…」目下建築中の「眺望閣」というふうに出てきています。南北に少し長いところなんですけれども。あと、史料の⑤——これは資料6のところなんですけれども——この『大阪名所附界名所独案内』という明治32年、ちょっと後のものなんです、これに「五階」の位置として「毘沙門堂ノ西ニ在リ」というふうに出ています。それから、資料7の史料⑦（『大阪名勝』秋浦生 青木嵩山堂 1904）については、「旧御蔵の東方半町ばかり」。「旧御蔵」というのはこの「大蔵省米廩」区画と書かれているところ、近世の御蔵があったところなんです、この東半町、50mほど行ったところにあるということです、概ねこんな感じかなあというふうに思っています。

こんな感じにちょっと広い範囲でなっていて、プロジェクターで映している地図（図1）に「難波蔵」と書いていますが、それが「旧御蔵」と言っているもので、その少し東ですね。ここに、これもう絵なのでどの辺かはっきりわからないんですが、「眺望閣」というのがリアルに描かれている。そして、下に「広田神社」があり、さらに下に「今宮戎」、いわゆる戎さんがあるということで、こういう関係になっているんですね。クローズアップすると、こういうかたちになっています。こういう地図なんかも参考にしながら見ていくと、先程の位置ぐらいでおよそ良いのかなということで、ちょっと印をしています。これが位置です。ちなみに後に「五階百貨店」というのがこの近所にできて、日本橋筋の道具屋さんがたくさんあるところに、この「五階」の名前を取った店が今もあるんですかね、ちょっと最近行っていませんが…。

そして、こういうのが位置関係なんですけれども、あとこれを造った建造者、造った人ということなんです、先程の「大阪朝日新聞」明治21年4月18日に依りますと、「西区私立富岡銀行の役員浅田外一名の発起にて」と書いてあるんでちょっとはっきりわからないんですけど、富岡銀行の役員をしている浅田という人物たちが造っているということが、この「大朝」の記事には出てきます。あと、その同じ新聞のところで「大阪朝日新聞」明治22年4月9日とか「大阪朝日新聞」明治21年7月10日の記事、明治21年、22年辺りの記事に依ると、「宣建社」という社名があるので、一応ここが会社組織になっていて、「宣建社」という会社がこの「有宝地眺望閣」を経営しているというかたちになっているということのようであります。

次に、この建物の規模については、「五階」ですので基本的に五層で形が八角、八角楼であると。そして、高さについては、今のメートルに直すと31mになるということなんですけれども、史料などを見て行きますと、例えば「五層ノ高樓ニシテ高サ十八間方錐形ノ八角楼ナリ」というようなのが出てきて、これ史料もですね、後の例えば資料6の資料⑥『大阪案内』（樋野亮一 駸々堂 1900）というのは明治33年の資料でありますので、できてから10年以上後の資料なんですけれども、高さについても「十八

間ナリ」と。18間というのはだいたい32mぐらいになっていると。で、同じような明治37年の、資料7の資料⑦『大阪名勝』（秋浦生 青木嵩山堂 1904）というものには「十七間三尺」というふうになっていて、これで直しますと31.5mくらいになるというものです。そして、新聞記事の方を見て行きますと、その明治21年4月18日、できる前の記事でいけば「五層楼にて其高さ百三尺」というふうにありますので、これは30.9mくらいになりまして、「大阪朝日新聞」明治21年7月10日の大きな英字の広告を見ますと、「其高さ十七間と壺尺」になっていて、これは30.9mになるんです。そういうことで、ものによってどのように何mかという記述が違って、どれを信頼すべきかということは、なかなか決定できないんですけども、およそ、「眺望閣」については31～32mくらいの高さを有していたのではないかというふうに考えられます。

そして、この建物の内容なんですけれども、非常に色々な内容を含んでいるんですが、この「眺望閣」というものの自体は楼閣なので、高いところに登って遠望するというような施設であるということは変わりはないんですけども、周りに少し植木とか庭のようなものがあつたようです。ある程度塔の足元に広い敷地があつて、少し建物も建ちながら、庭的な部分もありながら、全体の敷地が構成されている。塔だけが単立で建っているんじゃなくて、まさに「有宝地」という遊園地の中に建っているというような状況が窺えるわけです。実際文章で見て行くと、どういうふうなことが書かれているかと言うと、これは新聞で言いますと「大阪朝日新聞」明治21年8月15日付、できた1ヵ月後の記事なんですけど、そこには「今宮の眺望閣」とありますけれども、「西成郡今宮村の眺望閣は客月之を開きし而来其構内六千余坪の地内に借馬、写真、料理、大弓、揚弓等の諸行を開き夜に入りては花火を揚げ河内踊をなし納涼店を開くものありて娯楽を添へしかば…」と。そして、「昼夜眺望者の同閣に登ること甚だ多く第二の千日前とも見るべき光景となり居りし…」というふうにありますけれども、その「眺望閣」自体に登る人も多いんですけども、借馬に乗せたりとか、写真を撮ってもらえる写真館のようなものがあるんでしょうか。もちろん料理店や、弓を射る矢場のようなものがあるとか。夜になったら花火あげたりするというようなことで、多様な娯楽を提供するということで構成されているということなんです。敷地の中に色々な内容のものが同居していて楽しむ施設になっています。それから、夏の7月にオープンしたわけですけども、年が明けて22年4月になりますと、「大阪朝日新聞」明治22年4月9日の新聞広告なんですけど、「眺望閣庭内来ル十三日ヨリ夜桜」ということで、篝火を焚いて、夜花見ができますよと。そして、「眺望閣」の三階、四階に限って、自分で弁当を持ってきて食っても良いというような意味だと思うんですが、そういうふうなことが書かれている。花見ができるということなので、敷地内に桜の木が植わっていてそういう楽しみ方もできる、遊園のように楽しめるということになっています。

そういう感じで、色々な娯楽を提供しているんですが、その後少し変わったものとして、明治22年9月21日付の「大阪朝日新聞」、ここに「眺望閣の蠟細工」というものがあります。読みますと、「過日來南地の眺望閣に於て美術展覽會を称し諸人の縦覧に供せし蠟細工即ち蠟を以て人体の機関構造を寫出せるものは魯國醫學士リタブスキー氏の發明製作に係り其後濠国人エ、ナフタリーといふ人之を譲受け我國に携へ來りしもの、よしなるが、近頃當地評判の觀物となりし所より一日吾社員が試に一見を遂げしに如何にも其製作の精密真に迫り決して玩具視すべきものにあらず…」ということです。その後に展示の内容が書かれているんですが、「精虫及卵巢の一昼夜の経過より一週間又は二週間遂に分娩に至る

まで胎児の形状區別、男女生殖器の區別、子宮外胎児の形状…」ということで、あとはもう見て頂いたら良いと思うんですけども。いわゆる医学、つまり人間の誕生の神秘のようなものを表現したもので、今日的に言えば「人体の不思議展」的なものでもあり、あるいは秘宝館の方が近いのかもしれませんが、そういう趣がありまして、明治8年ぐらい以降、造化器論などのブームの中で、こういう人間の誕生というものの、ちょっとまあ言葉は悪いんですけど、スケベ根性的なみんな見たいというような部分も含めて見せるということ、蠟細工で鑑賞させるという展示がされていると。で、この「エ、ナフタリー」という人の蠟人形については、東京大学の木下直之さんが『美術という見世物』の中でお調べになっているんです。木下さんによると、明治23、24年に京都、大阪、東京を巡回した「妙絶人体解剖蠟細工」というものらしい。ここは明治22年なんですけどもね。木下さんの指摘のものより1年早いので、その辺の明治20年代前半に巡回したものかもしれないんですが。こういうかたちで、今の大阪で言えば、行吉さんはお分かりになりにくいんですけど、梅田スカイビルというところが大阪駅の北側にありまして、そこで「人体の不思議展」を今でもやっているんですけど、そういう展望台で「人体の不思議」をやりたいな、何となくそういうのを連想させるような見世物をやっている。そのような幅広いかたちで「五階」に人を集める、「有宝地」に人を集めるような企画がなされているということが分かってきます。花見から「人体の不思議」まで。

それで、この塔がいつまであったかという廃絶の時期については、なかなかよく分かっていない、今よく分かる資料がないので、ちょっと空欄にさせて頂いています。これが「眺望閣」、いわゆる「五階」として知られているものになります。

3. 商業倶楽部

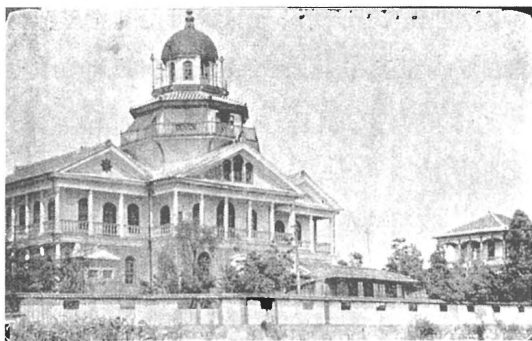


図2 商業倶楽部（『大阪案内』駸々堂、明治33年）

次に、資料2の(B)の「偕楽園商業倶楽部」というものです。「商業倶楽部」については、今日この画面で見て頂いているのは、大阪歴史博物館の館藏品（図2）ですが、これなんかは小さい資料であったので、見えにくくなっていて恐縮なんですけども。これが「商業倶楽部」の中の一部の建物で、本館的なメインになる建物です。明治22年とすれば、大変立派な洋館。他の大阪のもので言えば、江之子島の大阪府庁とかですね、そういったものに匹敵するような大変本格的な洋館であるように、写真からは見受けられるということになります。

この位置なんですけれども、先ほどの地図で御覧頂くと、これははっきり分かっておるんですが、図1のさっきの「眺望閣」があった右下の辺りのところになります。先程のあの小さな絵の地図にも出てきておったわけなんですけれども。この右下の部分、つまり南側のこの部分なんですけれども、この通りが今、我々が日本橋筋と言っておるところですね。この南に突き当たった角から東側に向けての敷地に建っていた。プロジェクターの方の資料（図1）ですが、そこに絵で商業倶楽部が天地逆に描かれてい

まして、これひっくり返すと、このあと御覧頂く資料と同じ建物が、結構リアルにですね、描いてある。これは後で、御覧頂く図と同じようなものなのですが。そして、この場所が、いま皆さんがご承知の通天閣がある新世界の北側部分ですね。通天閣の北側に色々お店が並んでいる、あの辺り。地下鉄の恵美須町駅を降りたあの辺りの一角が、この「商業倶楽部」があった場所ということになっています。このことは、資料を読んでおきますと、徳尾野有成という人が『新世界興隆史』というものを昭和9年に書いていますが、それをレジュメに4行ほど引いておいたんですけども（資料2の（B））、「只爰に当時の地情に比し不思議な存在は商業倶楽部であった。之は南区博労町の商賈岡崎栄次郎氏（現在不詳）」だから、昭和のはじめには行く方知れずだったんでしょうが、「の経営に係り、演芸宴会等各種の集会に充つるを目的とし御殿と呼ばれたほど相当に華麗を極め、地域二千四百坪（恵比寿通入口から春日通に及ぶ一帯）の広きを閉めていたが後ち会（注：内国勸業博覧会）敷地となり八万円に売却し、建物は平野大念仏寺に寄附したと云ふ事である」という。最後の部分はよく知らないんですけども、そういうことらしいのです。これは宮本又次さんの書いたものに依ると、船場で鉄商^{てつあきない}をやっていた岡崎栄次郎という人が、資料に出てきた人物だということです。

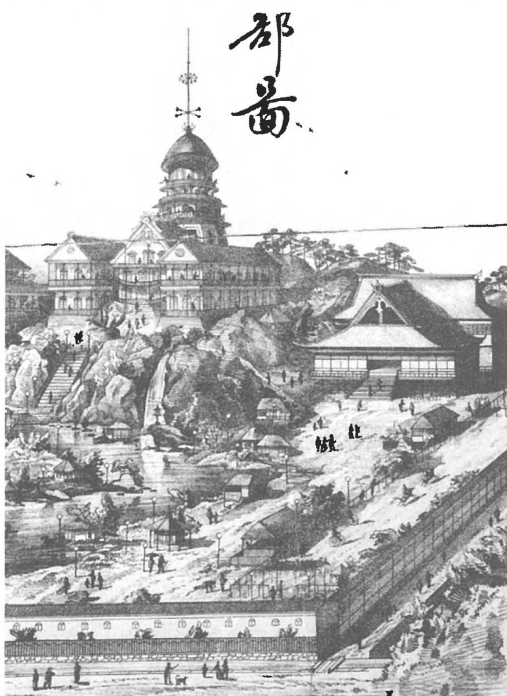


図3 商業倶楽部（「偕楽園商業倶楽部図」部分、明治22年）

その場所に、岡崎が造った「偕楽園商業倶楽部」があった。図で見て行きたいんですが、これが先ほどの写真で、この次ですね。この絵は私どもの館蔵品の写真を撮ったんですが（図3）、これは他の機関が所蔵している資料が『明治大正図誌』に載っているんですけども、同じものが当館にもあるんです。当館の資料はちょっと傷みが激しいので、全体写真を撮らずに部分写真を御覧頂いています。この写真の今投影しておるところの左側に大きな塔屋のようなものを伴っているものが、洋館部分になっておりまして、先ほどの写真に写っていたものです。で、右側に日本家屋と言いますか、和館が写っておりますけれども、これがここで俗に「御殿」と呼ばれていたもので、おそらくは資料によれば、資料5の史料②（『大阪けんぶつ』矢島嘉平次 矢嶋誠進堂 1895）に「能狂言舞等」をやっていたとありますが、そういうものはおそらくこの「御殿」の部分でやっていたのではないかなというふうに推測されます。「御殿」

の位置からすると、洋館の位置が大変高い。洋館は丘の上のようなところに造られていまして、そこから滝が落ちているというようなところなんです。この史料なんかにも「瀑を落し」というようなことが書かれています。そして、その下に池があって、ここで「魚を養ひ」なんて書いているものもありますけれども、そういうかたちで山水庭園的なものがあり、その周りに東屋のようなものがたくさんあるというようなかたちになっています。これが向かって右側のゾーンになります。そして、このクローズアップしているところが、丘の上の洋館の左側、この部分がその塔のある洋館なんですけれども、ここに渡り廊下があって、左側に二階建ての洋館が建っていまして、さらにまた何か分からないけれど付属屋があ

ります。こっちの部分でも、何でしょう、ここで料亭的なことをするのか、或いは「玉突場」とか「新聞縦覧所」があったとも書いてあるので、そういうものがもしかするとこういうところにあったのかもしれない。さらに、この下ちょっと御覧頂くと、池に噴水があって、噴水をよく見るとこの恵比寿さんが鯛を担ぎ上げていて、そこから水が出ている。場所が今宮戎神社の近所なので、そういう想像力の逞しいところかもしれないんですが。実は私、さっきまで全然気付いてませんでしたけれども、今よく見るとそういう絵柄になっていますね。なかなか面白いものですね。で、これが正門からの図で、東西の通りに面して橋が架かっており、正門があって、そこから中に入って行って、さっきの噴水のところに至ってという。そういう入口にもプロムナードがあるというようなかたちになっています。そして、左サイドにも大きな池があって、その池の端に東屋がやっぱりたくさんあって、ちょっとここで休憩してお茶を飲んだり、料理を食ったりもできるようなスペースがあります。これが一番左の端、図の端ですが、遠くにこれ、四天王寺さんでしょうかね、塔が見えておりますけれども、ここの端に煙突が見えていて、ずっと長屋のような形で巡らされている。この煙突が何かははっきりしたことはわからないんですが、レジュメの史料なんかを見ていくと、温泉があるというようなことを書いているものがあるので、当然ご承知のように、ここで天然の温泉は湧かないので、明治期の言葉で言えば「温泉」というのは風呂、銭湯のようなものを温泉というようなこともあるわけですから、この煙突から出ているのが温泉の、風呂場のお湯を沸かしているものかもしれないと思ったりしています。それにしても随分立派な煙突なんですけれども、そういう可能性もあるのかなと。下の建物はお風呂にしては何か狭いような気もするんですけれども、そういう煙が上がっているものがある。これが「商業倶楽部」なんです。

この「商業倶楽部」というものについては、橋爪紳也さんが『倶楽部と日本人』等で丁寧にお調べになっています。例えば、この資料5の史料③、宇田川文海『大阪繁昌誌』等を見て頂くと、今宮村にてやっているものであって、岡崎が独力で四千八百坪の田地を買って造ったと。で、色んな施設があるんですが、この最後から3行を見ますと「この内にて諸物品を霽がせ、勸商場の体裁なりしが、今はこれを廃して全然の遊園地とせり」と。そして、「入場料は二銭なり、若しこの内に遊ば、又半日の快樂をとるに足れり」といって、入場料が二銭なので、ここの施設は倶楽部と言いながら、いわゆる会員制倶楽部ではなくて、入場料を出したら誰でも入って遊べるという、そういうものになっています。だから、大阪でも明治期ですと、今もまだ残っています大阪倶楽部とか、そういうものもでき始めるわけですが、そこはいわゆる純然たる会員制倶楽部なんですけれども、ここは「商業倶楽部」と言いながら遊園地的に開放されているというかたちになっているのが特徴です。その中心の建物に、写真の望楼付きの洋館があったということです。この建物は廃絶したのは、第五回内国勸業博覧会の用地として売却されたということですので、明治35年前後辺りまで続いて、明治36年の内国勸業博覧会で潰れてしまったということになります。

4. 凌雲閣（九階）



図4 凌雲閣（『大阪繁昌誌 下巻』東洋堂、明治31年）



図5 凌雲閣付近地図（『大阪実測図』一部加筆、明治19年）

さて、次が三番目、資料2の（C）の「有楽園凌雲閣」、「北の九階」といっているものなのですが、これは名前が先ほどの行吉さんのお話にあった浅草の「凌雲閣」と同じ名前なんですけれども、俗に9層あるので「九階」と言っていて、読み方はとりあえず今日は「くかい」ということにしておきたいのです。「きゅうかい」ではなくて「くかい」というのは、ルビの振ってある史料で、「九」の部分にルビがあるのはどれも「く」となっているので、読みは「くかい」ということにさせて頂こうかなというふうに思っています。それで、写真をまず見て頂くと、これがこの建物で一番有名な写真（図4）、ほとんどこの写真しか流通していないくらいのもんです。この右側に一際大きく聳えるのが「凌雲閣」です。浅草の「凌雲閣」と頭の部分とか若干似ていなくもない。こちらはもちろん、煉瓦造とかそういうものではないんですけれども、大阪では当時では高層建物というわけです。

場所なんです、また地図の方を参照して頂きますと（図5）、北区茶屋町あたりになると思います。具体的な場所で言うと、今なくなりましたが旧梅田東小学校があった辺りというふうに考えられるのではないかと考えています。資料5の史料②（『大阪けんぶつ』矢島嘉平次 矢嶋誠進堂 1895）には「北野村の鉄道線路踏切の北にあり」と書いてあります。その黄色く塗っている右側にここの「鉄道筋」が線路を渡っている部分がありますが、これがこの史料でいう「北野村の鉄道線路踏切」ということで、その北にあるということなんです。私も、この間から頭を悩ませていたんですけれども、北って言ったらこの道路の右側なのではないかと思ったり、でも左かなあというふうにも考えていたりしたんですけれども。レジュメに引用しているんですが、実はその資料5の史料②（『大阪けんぶつ』矢島嘉平次 矢嶋誠進堂 1895）、資料7の史料⑦（『大阪名勝』秋浦生 青木嵩山堂 1904）とあって、その下のカギカッコのところに、赤塚康雄さんが大阪の小学校の変遷をずっと調べておられるんですけれども、その中にこういった記述があります。まだ突っ込んで調べていないんですが、その赤塚さんからの引用を読みますと、（資料2の（C））、「[第一北野尋常小学校]」これは後の「梅田東小学校」ですが、これは「当時、九層建ての遊技場として評判の「凌雲閣」の遊園地に目をつけ」、何で目をつけたかとい

うと、学校を広く拡張して移転したかったからなんです、「その一部千八百十九坪を一万円で購入、木造二階建校舎二棟を新築し、明治三十九年九月に移転した」とある。1800坪というと600m²のようで、割と狭いんですね。20×30mぐらいの非常に狭いところなんですけれども、そこに明治39年に移転したというふうに書かれているので、この「凌雲閣」が建っておった「有楽園」の敷地の一部がこの小学校敷地となり、後に名称が変わって「梅田東小学校」になったのではないかなというふうに考えているんです。そして、この写真（図4）なんです、ちょっと不鮮明で恐縮ですが、写真の左側に写っていますこの道路が、大阪市街から郊外の方に抜けていく、この踏切を越えて渡っている道路なんだろうと思われれます。私も最初よく分からなかったんですが、よく見るとこの写真の上部の薄いスカイラインの辺りに、家が建っているのが若干見えるんですね。ご承知のように、ここから北側はもうそんなに家が建っていたりする場所でもない、おそらく南、南東側の家が建て込んであるあたりが写っているのではないかなと。ということは、この写真は北から南を見て写したもので、道路の右側つまり西側にこの「凌雲閣」が建っているのではないかなというふうに推測しまして、そういう意味で「梅田東小学校」の場所にあるということもそのことと合致をするので、この踏切の西側にあったという解釈で良いのではないかなと、今の時点では考えています。

さて、この建物は、史料によりますと、檀重三という人が造ったもので、それを後に鷺尾宇兵衛という人に譲渡したというふうなことが言われています。これは資料5の史料③（『大阪繁昌誌』宇田川文海 東洋堂 1898）、先ほどから出ている宇田川文海の史料にそういう名前が出てくるんですけれども、檀重三が造って明治21年3月に棟上げをして、ほぼ落成するに及んで、明治31年のときの所有者である鷺尾宇兵衛氏に譲ったというように書かれています。ただ、この人物についてはよく分かっていません。

建物の規模は「九階」なので9層建てなんですけれども、上の方が写真を見るとスケルトンばく結構透けている。先ほどの東京の「凌雲閣」に比べると、かなり骨組み的な構造を取っているのだという感じがします。高さについては、これもやはり東京の「凌雲閣」に比べると低くて、諸説あるんですが、史料によって高さ23間(41m)ほど、或いは100尺(30m)、或いは27間(48m)というふうに、書いているものによってまちまちでありまして、広く取れば30～48、49mということになるかと思われるんですけれども、その程度幅がある。およそ、…あまりにもおよそなんです、40m規模の建物だったのではないかなというふうに考えています。

そして、この建物についても、色々な絵があります。上に塔があって、下にやはり池があって木が植わっているというような情景が描かれてるものもあります。池越しに先ほどのあの浅草の「ひょうたん池」ほど大きくはないような気がするんですが、池が描かれたりする。あるいは、「凌雲閣」が描かれている上に、門があって軒灯がありまして、中に少し樹木が植わっており、ちょっと奥に何か建物がある。そして、出た手前のところにも、提灯が下がった建物があると。そういうふうなかたちになっています。この「北の九階」の場合も「南の五階」なんかと似たように、下に遊園地を持っているような施設になっています。資料5の史料②を見て頂きますと、矢島嘉平次『大阪けんぶつ』というものがあるんですが、この『大阪けんぶつ』によって、「凌雲閣」のところを読みますと、「俗に北野の九階といふ北野村の鉄道路線踏切の北にあり入場金三銭にて諸人の登閣を縦すこゝに登れば大阪市中を一眸の下に

眺め心気頗る爽快なり園内に樹木茂りて所々休息所を設け来賓の需に依り飲食を供す、此近所に鶴の茶屋、車茶屋、小林遊園地、植木茶屋等ありて何れも貸席を営む、近來三番の入口に朝妻と云る貸席出来て頻りに繁昌し他の貸席を圧倒せり」というふうに、「九階」に登閣するために入場金が三錢、先程の「商業倶楽部」は二錢でしたけれども、三錢払ったら誰でも入ることができる。そして、塔の上からは一眸に市内が眺められるんだけど、この「有楽園」の園内は樹木がしっかり茂っていて、東屋のような休憩所があって、頼んだら飲食をすることもできるということで、この施設全体が一つの遊園として機能している。なお、大阪の方はご存知のように、この茶屋町の辺りには「鶴の茶屋跡」碑があったりするような——茶屋町という名前自体がそうですけれども——「鶴の茶屋」とか「車茶屋」とか、或いは「小林遊園地」というような、これは小林左兵衛という侠客がやっていた遊園地だそうですが、そういうものもあって、茶店なんかが多いところです。この辺りは、春の時期になると菜の花がよく咲いていて非常に美しい。あの鉄道唱歌なんかにも歌われていますけれども、大阪駅近辺のこの菜の花畑なんかを見て楽しみながら、こういうところの茶店で一服というようなことをする場所なんで、この「凌雲閣」についても単に高いところに登るというだけではなくて、そういう足元の施設と一緒に楽しむというものとして、あったのではないかなと思っています。

さて、この施設の廃絶なんですけれども、これもいつなくなったかはっきり分からないんですが、資料7の史料⑧に坪谷水哉『日本漫遊案内 西半部』というものに「凌雲閣 梅田の北、茶屋町にあり」と書いてあって、「楼上の眺望爽快なれど、何故にや近來頽廢して振はず」ということで、明治38年に出たものですが、もう既に振るわないと書いてある。次に、史料⑨の加藤紫芳『大阪案内』も「凌雲閣」について触れておるんですが、俗に「北野の九階といふ元北野の鉄道線路踏切の北にあり入場券を徴して諸人の登閣を縦す」。これ先程どこかで読んだ文章の、いわゆるパクリと言いますか引用のようなんですけれども、よく読むと、「元北野の鉄道線路踏切」ってあるその「元」っていうのがちょっと引っ掛かっておるんですけれども、41年の段階ではこうあるんです。翌42年にこの『大阪案内』の翌年版が出るんですけれども、それを引き比べてみると、「凌雲閣」のところにすっぱり「毛馬閘門」が入っているんですよ。同じ行数を「毛馬閘門」に変えている。ということは、この明治41年ですが、翌42年は淀川改良工事が竣工しまして、毛馬閘門のところで竣工式が行われた年なわけです。それが話題の新名所なので差し替えたんだけど、差し替えられるに足るような状況だったのではないかなと。実際、そのときにこの塔があったのか、もう壊されていたのかははっきり分からないんですけれども、少なくとも明治40年前後には、もうかなり廃れているということが言えると思います。

5. 浪花富士山

さて、次に、資料2の(D)の「浪花富士山」。先ほど写させて頂いたこれなんです、当館の館蔵資料(図6)、ちょっとぼんやりしていてすみません、この場所は、生国魂神社、生国魂さんの近所にあったと言われていまして、源聖寺坂の上にあるというふうに書かれている。明治22年4月5日の「大阪朝日新聞」の記事に依りますと、「今度生国魂に築造する富士山の模型は西高津村の共有地より大倉信之の所有地と齡延寺の境内とに跨り」とあって、概ねこの辺と思って頂いて。源聖寺坂を上った上の北側か

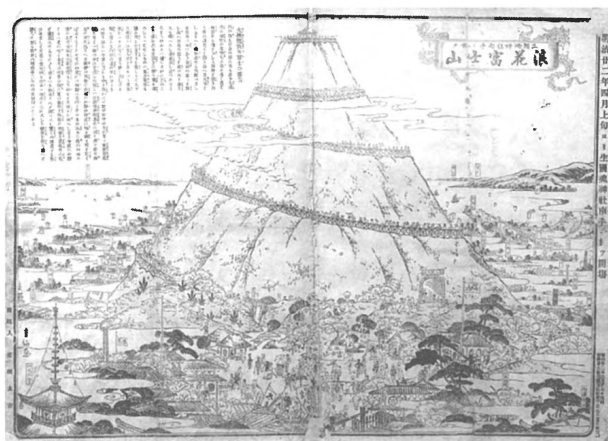


図6 浪花富士山（浪花富士山一枚刷、明治22年）

南側かちょっと分からないんですけども、その辺にあります。

この「浪花富士山」なんですけれども、建造したのは大倉（大蔵）信之という人物だと言われています。その新聞記事に出てくる人です。この辺の事情について詳しいのは、資料4の参考文献のところにあげていますが、船本茂兵衛が「上方」第18号（昭和7年）に『「浪花富士」物語』という4頁ぐらいの短い記事を書いていまして、そこにこの大倉という人物が高津村の元戸長で、この大倉の発案で建てたというふうに船本さんは

言っておられます。

規模は、高さ10間と言われているんですけども、この一枚刷りは先ほどの東京のと一緒で、非常に本物の富士山のように描かれているんですが、実際は絵とは似ても似つかぬ、張りぼてのごつごつとした富士山で、側面に富士山の絵が描いてあるという、結構食わせものの、まあ何って言ったら良いのか分からないような代物です。この一枚刷りにも、螺旋状の道で上にぐるぐる上がって行けるように、時計回りに上られるようになっていますが、確かに写真にも非常に荒っぽい丸太組みのような螺旋で上られる部分が付いていまして、上に上がることもおそらくはできたんであろうと。事実、写真の上の方を見ると、蝙蝠傘みたいなものが写っているので、やっぱり上には登れたんじゃないかなというふうに考えています。

この施設の中身ですが、これもこの一枚刷りで分かるように、下にやはり樹木が植わったりして色々あります。例えばこれですね、富士山の足下に何か煉瓦で積んでいるような入り口になっていますが、これほんまに煉瓦なんかちょっと微妙です、写真で見ると。煉瓦というのはトンネルというイメージで書いているんだとも思うんですが、「生人形入口」というふうに書いてあります。で、さらに別の箇所を見ますと、幟が上がっていまして、「東海道五十三次」「生人形」と書かれています。「大阪朝日新聞」明治22年4月5日の記事を見ますと、せっかくですから読みましょうか。「生国魂の大富士」ということで、「今度生国魂に築造する富士山の模型は西高津村の共有地より大倉信之の所有地と齡延寺の境内とに跨り余程宏大なるものにて周囲には五十三駅の景色を写し弥次郎兵衛喜多八等の生土偶を設け各駅々を経たる後登山せしむるの趣向なるよし」と、「尤も不二山は少し落成の期の延引すれども五十三駅と生人形丈は来る十日頃より縦覧させる予定なりといふ」ということで、弥次さん喜多さんの東海道五十三次の生人形を作って見せるんだと。そして、「周囲には」と新聞記事には書いてありますけれども、実際のこの写真、一枚刷りによると、中へ入っていくようになっているんで、この胎内巡りふうの中でこれがやられていたのかもしれない。この東海道五十三次の生人形という思い出すのは、大阪の場合、そのレジュメの一番下に書きましたけれども、生人形師として著名な安本亀八が明治3年、非常に早い段階に、難波新地で「東海道五十三次道中生人形」という興行をやっています。この時期からするともう20年近く前なんですけど、ただこの安本亀八は明治21年、この「浪花富士山」の前年に東京の浅草

の池之端で、弥次さん喜多さんの東海道五十三次をやっているというようなことですので、ここからは推測なんですけど、東京で安本亀八が五十三次の興行をやって、翌年大阪でもこんな富士山ができたんで、ここでもやろうかというような話になって、それを持って来て大阪でやった可能性もあるのかなというふうに思っているというところなんです。はっきりそうだと言い切れるような資料は、今のところありませんし、富森盛一さんの『生人形師安本亀八』なんかを見てもその事実は書かれていないので、もうちょっと資料を調べる必要があるかもしれません。

あと、その他の施設としては、「料理」「お料理」という旗が揚がっていたり、横に煙突がありますが「温泉」という旗が揚がっていたりするんで、「浪花富士山」の足下でもやはり料理を食べさせたり、お湯に入らせたりするというのがあったということです。ちなみに、後ろに「眺望閣」が描かれていたり、もうちょっと見ますと、こちらに「商業倶楽部」があったりするので、類似施設をきっちり描いているということで、ここに住吉の高灯籠がありますけれども。そういう感じになっています。

それで、大阪におけるこのいわゆる「富士山」の話なんですけど、今回新聞等を見ている中で見つかったのは、随分古い史料なんですけれども、「大阪朝日新聞」明治12年8月16日付の新聞記事に「富士山」のことが出てきました。これはですね、「富士山現はれ出で琵琶湖湧出づ」という記事で、「といえは看官喫驚なさるだらうが此頃其形ちの現はれしは幸町」、これ今の浪速区ですね、「幸町の魚藤が発起にて這回該町の裏畑を五百坪斗譲り受け高く富士山を築成し深く琵琶湖(二百坪)を掘開き中に活潑なる鉄鬣公を養ひ来客の需に応じ艇女をして躍一躍水に入らしめ地底に相□逐せしめ以て客心を怡ばしむべし」ということで、この「幸町の魚藤」という料亭でしょうか、それが近所の畑の敷地を五百坪ばかり譲り受けて、そこに「富士山」を造って「琵琶湖」まで掘ったということです。そして、その池に鯉を飼って、艇女（海女）を潜らしたというのが、「ほんまかいな！」と思うんですが、そういうことをやっている。で、これは明治12年、「浪花富士山」よりも10年も前のことなので、直接の関係はないだろうし、これは土を築いた築山のようなものかもしれないんですけども。こういうことで、先ほど富士塚の話なんかもありましたけれども、大阪は直接富士山が見えるところでもないですけども、こういうことをやった人が既に10年前にいたということが分かります。そして、東京の「富士山」のことは、行吉さんからお話しがありましたので割愛しまして、大阪の方もはっきり分からないんですが、1、2年で「浪花富士山」は閉場するという事になったようです。

6. まとめにかえて

ということで、一通り4つの展望所のある施設を見てきたんですけども、最後にちょっと＜遊園地の系譜と展望所を持つ施設＞ということで、まとめに代えさせて頂きたいんです。

今日、縷々お話したように、このような展望所、いわゆる塔のある施設でも、周りに庭や池を伴うというケースが多いということなんです。例えば、大阪歴史博物館の館蔵品に、「霞遊園地」の画像があります。霞町、今の新世界の旧フェスティバルゲートの辺ですよ。つまり、「商業倶楽部」とか「眺望閣(五階)」とかがある近所ということなんです。ここにもやはり、「霞遊園地」という遊園地がある。建物があって、池があって、庭があって。ここはですね、何年かはっきり分からないんですけども、

明治の前半ぐらいのものらしい。心斎橋の西村という人が造ったんですが、「園友」という、一応会員制で、月会費を払ったら会員＝「園友」になれてパスがもらえるんですが、パスを持ったら、5人とか10人の友だちを連れて来てここで遊べるんで、事実上「大勢で来てもええよ！」っていう、そういう施設なんですけれども。こういう遊園地のようなところで園遊を愉しむと。そして、飲み食いをしたりもするというようなことが、大阪では近世から明治ぐらいにかけて幅広く行われていたんです。そういう遊園地というものの中に塔的なものが造られて来たというのが流れとしてあります。大阪においては、先に遊園地があって、そこに高いものが造られるというふうに展開したのではないかなというふうに思っています。そういう意味で、今日的に言えば、この「五階」も「九階」も「塔」なんだけれども、現代風に「塔」というと誤解を招くのではないかということで、今回「展望所」というふうに呼んだわけです。それが、遊園地全体を「展望所を持つ施設」というふうに、変な言葉ですが、良い言葉がないのでそう書いていたのです。

レジュメの最後には、資料3の【大阪の展望所を持つ施設の変遷】ということで、近世から明治期まであります。今日お話した明治20年代のものの次は、第五回内国勸業博覧会に登場する「大林高塔」という高さ50mある塔、これはエレベーターもあったんですね。その塔ができます。これは「大林高塔」という呼び方を当時からしていて、その塔の側面には「望遠楼」と書いたりしているんですが、初めておそらく「塔」と呼ぶものが大阪でも内国勸業博覧会のときに出てきた。その後、ご承知の初代「通天閣」があり、さらに「楽天地」のドームの展望所「登仙閣」というのは若干違うかもしれないけれども。このインドアな遊び場に展望所を付けたというのが「楽天地」ということで。ずっとそういうかたちで展開していくということで、展望施設とその周りをセットにして、大阪の場合、考えた方が良いでしょうかなということです。

今日、私が一番行吉さんにお尋ねしたいのは、東京ではじゃあ、この辺りのことはどうだったんだろうかなということ、この後お教え頂けたらということで、考えておりました。ちなみに大阪歴史博物館の館蔵品にあるものですが、8年前の特別展「豪商鴻池」に出品した、他ではあまり見かけない、「北の九階」の写真(図7)もあります。池越しに撮っているものなんですが、珍しい写真です。参考のために紹介させていただきます。では、私の報告はこれで終わらせて頂きます。ありがとうございました。



図7 鴻池家旧蔵ステレオ写真「大坂 九階遠望」(部分)

【資料1】

2011年3月22日 大阪歴史博物館

江戸東京博物館・大阪歴史博物館 共同研究会

大阪における明治20年代の展望所を持つ施設について

船越幹央（大阪歴史博物館学芸員）

1. はじめに
2. 明治20年代建造の展望所を持つ施設

明治21年（1888）

7月13日 眺望閣（南の「五階」）…A

明治22年（1889）

3月31日 商業倶楽部 …B

4月7日 凌雲閣（北の「九階」）…C

9月19日 浪花富士山 …D

※建造年月日は『新修大阪市史』第5巻・10巻により、浪花富士のみ 船本1932による

(A) 有宝地 眺望閣（五階）

■位置：浪速区日本橋西1丁目（旧・西関谷町）付近

大朝・明21. 4.18「西成郡今宮村字関谷と云ふ地に」

史料⑤「毘沙門堂の西に在り」

史料⑦「旧御蔵^{おくらあと}の東方半町ばかり」

■建造者：宣建社、（西区・富岡銀行役員 浅田ほか）

■規模：5層、八角楼、高さ約31～32m

史料④「木製の五階造り」

史料⑥「五層ノ高楼ニシテ高サ十八間方錐形ノ八角楼ナリ」（32.4m）

史料⑦「高さ十七間三尺」（31.5m）

大朝・明21. 4.18「其高さ百三尺」（30.9m）＝大朝・明21. 7.10「其高さ十七間と壹尺」

■内容等：大朝・明21. 8.15「借馬、写真、料理、大弓、揚弓等」「花火」「河内踊」

大朝・明22. 4. 9「夜桜」

大朝・明22. 9.21「蠟細工」

「エ・ナフタリーによる「人体の機関構造を写出せるもの」

*明治23～24年に京都・大阪・東京を巡回した「妙絶人体 解剖蠟細工」（木下1993）

■廃絶：

【資料2】

(B) 偕楽園 商業倶楽部

■位置：浪速区恵美須東2丁目付近（新世界の北部分）

「只爰に当時の地情に比し不思議な存在は商業倶楽部であつた。之は南区博労町の商賈岡崎栄次郎氏（現在不詳）の経営に係り、演芸宴会等各種の集会に充つるを目的とし御殿と呼ばれたほど相当に華麗を極め、地域二千四百坪（恵美須通入口から春日通に及ぶ一帯）の広きを占めていたが後ち会敷地となり八万円に売却し、建物は平野大念仏寺に寄附したと云ふ事である」（徳尾野1934）

■建造者：岡崎栄次郎（南区博労町の鉄商）

■規模・内容等：約4,800坪、5層楼の洋館、「御殿」、庭園など

史料③「豪商岡崎栄三郎氏、八万円の金を擲ち、独力を以て四千八百坪余の田地を買ひて創立」

史料②「売店」「数軒の料理店茶店」「能狂言舞等」「温泉、玉突場、新聞縦覧所等」「電灯機械

史料④「洋館あり、和館あり、舞台あり、小亭あり、山を築き、池を掘り、樹を栽ゑ、瀑を落し、橋を架け、鳥を放ち、魚を養ひ、料亭あり、茶舗あり、温泉あり、和洋折衷の一大別業」

■廃絶：内国勸業博覧会の用地に売却（明治34～35年頃）

(C) 有楽園 凌雲閣（九階）

■位置：北区茶屋町（旧梅田東小学校）付近

史料②「北野村の鉄道線路踏切の北にあり」

史料⑦「梅田停車場より東北三丁ばかり、北野茶屋町にあり」

「[第一北野尋常小学校は]当時、九層建ての遊技場として評判の凌雲閣の遊園地に目をつけ、その一部千八百十九坪を一万円で購入、木造二階建て校舎二棟を新築し、明治三十九年九月に移転した」(赤塚1995)

■建造者：檀重三（北区堂島）→ 鷺尾宇兵衛

■規模：9層、高さ約30m～49m

史料③「高さ廿三間なり」（41.4m）

史料⑥「其高百尺」（30m）

史料⑦「九層の高閣にして、頂上まで二十七間といふ」（48.6m）

■内容等：史料②「園内に樹木茂りて所々休息所を設け来賓の需に依り飲食を供す」

■廃絶：史料⑧「何故にや近来頽廢して振はず」（明治38年）。同39年頃に一部敷地を小学校に売却

(D) 浪花富士山

■位置：天王寺区生玉町付近（源聖坂上、生玉公園～齡延寺付近）

大朝・明22. 4. 5「今度生国魂に築造する富士山の模形は西高津村の共有地より大倉信之の所有地と齡延寺の境内とに跨り」

■建造者：大倉（大蔵）信之（西高津村の元戸長）・・・一枚刷には安田友吉とある

■規模：高さ10間（18m）

【資料3】

■内容等：東海道五十三次生人形、温泉、料理

大朝・明22. 4. 5「周囲には五十三駅の景色を写し弥次郎兵衛喜多八等のいき生にんぎやう土偶を設け」

*安本亀八、明治3年(1870)、難波新地にて「東海道五十三次道中生人形」を興行。明治21年(1888)、浅草公園池端でも興行（“弥次喜多宿屋外”？）（『生人形と松本喜三郎』、倉田1980、富森1976）

【大阪における富士山の先行事例】

大朝・明治12年(1879) 8月16日付

「○富士山現はれ出で琵琶湖湧出づといへバ（中略）幸町の魚藤が発起にて這回該町の裏畑を五百坪斗り譲り受け高く富士山を築成し深く琵琶湖（二百坪）を掘開き」

【東京】明治20年(1887) 11月、木造富士縦覧場

「木骨石灰ぬり、高さ十八間、上り二百間、下り二百三十間の富士山にして、不器用のさゝみ殻の如きものなり。二十年八月十日成就、同三十日開業式を行ひ、十一月六日より、始めて公衆に登覽せしむ」・・・2年足らずで撤廃（明治事物起原）

■廃絶：「半年と経ち一年もせぬ間に、収支償はず経営困難となり閉場の止むなきに至つた」（船本1932）

3. 遊園地の系譜と展望所を持つ施設

■今宮村の「霞遊園地」

明治10～20年代か

発起人：心齋橋の西村半助

「園友」システム

遊園のなか？に塔屋のある洋館が見える

■明治期の展望所を「塔」と呼ぶことへの躊躇

史料上も「塔」でなく「閣」が多数

【大阪の展望所を持つ施設の変遷】

【近世～明治期】

料亭の庭園・遊園地（近世は梅屋敷・吉助などもあり）
市街地＋近郊に立地



【明治20年代（1885～95頃）】

遊園地＋展望所（展望所付き施設）
（例）霞遊園？ 五階・九階・商業倶楽部・浪花富士山



【明治36年（1903）】

内国勸業博覧会＋塔＝「大林高塔」（「望遠楼」、約50m）



【明治45年（1912）】

新世界＋塔＝「通天閣」（約75m）



【大正3年（1914）】

楽天地＋展望所＝「登仙閣」（ドーム状）



百貨店の屋上（大正・昭和）、戦後の塔（二代目通天閣など）、万博＋太陽の塔（1970）へ…

【資料4】

【参考文献】

- 赤塚康雄『消えたわが母校』（柘植書房、1995）
石井研堂『明治事物起原』（日本評論社、1969）
木下直之『美術という見世物』（平凡社、1993）
倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』（岩波新書、1980）
田中三寶「揺籃時代の大阪美術と見世物」（「上方」99号、1939所収）
徳尾野有成『新世界興隆史』（非売品、1934）
富森盛一『生人形師安本亀八』（赤目出版社、1976）
橋爪紳也『倶楽部と日本人』（学芸出版社、1989）
橋爪紳也『明治の迷宮都市』（平凡社、1990）
橋爪紳也『日本の遊園地』（講談社現代新書、2000）
船本茂兵衛「『浪花富士』物語」（「上方」18号、1932所収）
丸山 宏「富士の近代」（『視覚の19世紀』思文閣出版、1992所収）
宮本又次『大阪繁昌記』（新和出版、1973）
『明治大正大阪市史』第1巻
『新修大阪市史』第5巻、第10巻
『生人形と松本喜三郎』図録（同展実行委員会、2004）
i s 別冊『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』（ポラ文化研究所、1998）

【資料5】

明治後期の展望所を持つ施設に関する史料

二〇一二年三月二十二日 船越

①

明治二十八年（1895）

梅川三濱『大坂名所独案内』

（前略）是より下三番村に出れば……（九階凌雲閣）あり名に背かず九層の高閣雲を貫く計りに聳ゆ此楼上に登りて眺望すれば眼下なる鶴の茶屋をはじめ数々ある茶店の庭内には樹木鬱蒼として時得し草花交々に咲乱れ其所此所の大座敷亭座敷は瓦葺藁葺と種々位置よく建ち其妙なるは天然の盆栽を見るに似たりそが中央を矢を射る如く走る梅田通ひの火輪車速なり（後略）

②

明治二十八年（1895）

矢島嘉平次『大坂けんぶつ』（矢嶋誠進堂）

商業倶楽部 逢阪山を下りて今宮の取付に巍然たる五層樓空に聳え其周圍に家屋建列なりて宛然小城廓の如きものあり是なん今宮商業倶楽部にて入場券料を払へば何人にも随意に入場するを得らる、場内に売店ありて博物場内の売店と同様なり、また場内数軒の料理店茶店あり、西手に御殿と唱ふる二階建の広座敷ありて能狂言舞等の催しをりあり其他温泉、玉突場、新聞縦覧所等あり、且電燈機械を備へて電燈を点ず、（後略）
難波停車場 （前略）また此パノラマ館の南二三丁の処に五層樓の聳ゆるは今宮の眺望閣にて入場料を払へば誰にても随意に上る事を得るなり。
凌雲閣 俗に北野の九階くかいといふ北野村の鉄道線路踏切の北にあり入場金

三銭にて諸人の登閣を縦すこゝに登れば大阪市中を一眸の下に眺め心気頗る爽快なり園内に樹木茂りて所々休息所を設け来賓の需に依り飲食を供す、此近所に鶴の茶屋、車茶屋、小林遊園地、植木茶屋等ありて何れも貸席を営む、近來三番の入口に朝妻と云る貸席出来て頻りに繁昌し他の貸席を圧倒せり。

③

明治三十一年（1898）

宇田川文海『大阪繁昌誌』（東洋堂）

◎商業倶楽部

今宮村にあり、明治二十一年の秋、豪商岡崎栄三郎氏、八万円の金を擲ち、独力を以て四千八百坪余の田地を買ひて創立したるものなり、洋風の館、御殿作の舞台、小亭などがあり、山を築き、池を掘り、瀑を落し、橋を架け、鳥を放ち、魚を養ひたり、この内にて諸物品を鬻がせ、勸商場の体裁なりしが、今はこれを廃して全然の遊園地とせり、入場料は二銭なり、若しこの内に遊ば、又半日の快樂をとるに足れり

◎眺望閣

明治十一年の建築にして五階造なり、其頂上より眺望すれば、西北は淡路島、摂津、播磨の諸山に對ひ、東南は紀伊及び河内、和泉の諸山を見渡し、風景実に佳なり、

◎凌雲閣

北郊に聳ゆる九層の樓閣なり、一名を有樂園といふ、堂島の人檀重三氏が、明治廿一年三月上棟式を行ひ、粗落成するに及びて現今の所有者、鷺尾宇兵衛氏に譲る、九階の第一層は百坪にして、高さ廿三間なり、苑内広く、四時の花木を栽て人目を楽しましむ、縦覧人一ヶ月平均五百人に上るとい

【資料6】

ふ、(後略)

④

明治三十二年(1899)

宇田川文海『南海鉄道案内』(南海鉄道)

商業倶楽部 難波停車場より拾丁

今宮村にあります、廿二年の秋、府下の豪商岡崎栄三郎氏が八万余円の金を擲ち、独力を以て四千八百余坪の田地を買って創立したのです、洋館あり、和館あり、舞台あり、小亭あり、山を築き、池を掘り、樹を栽ゑ、瀑を落し、橋を架け、鳥を放ち、魚を養ひ、料亭あり、茶舗あり、温泉あり、和洋折衷の一大別業、始めは園内の長屋にて諸物品を霽がせ、勸商場の体裁でしたが、今は夫を止めて、只遊園一方となり、二銭の入場賃を取て、公衆の遊び場に供へてあります、春秋二季の彼岸、及び月に花に、遊客常に断えませんが、今は孰も衰微の傾きはございますが、難波の眺望閣、北野の凌雲閣と、此商業倶楽部は、近年新に出来た市内の三大遊園で、中にも規模の壮大なのは倶楽部が第一です、

北野凌雲閣 難波停車場より卅丁

は北野に聳ゆる九層楼です、一名を有楽園と云ひ、最初は堂島の人檀重三氏が、明治廿一年三月上棟式を行ひ、粗落成するに及んで、現今の鷺尾宇兵衛氏の所有となる、くかい九階の第一層は百坪、高さ廿三間、其壮大以て思ふ可し、苑内も広く、四時の花木を栽て人目を娛ましむ、縦覧人平均一个月五百人に上ると云ひます。

眺望閣 難波停車場の前

該閣は去る明治十一年の建築で、木製の五階造り、(後略)

⑤

明治三十二年(1899)

『大阪名所附堺名所独案内』(発行者不明)

九階^{くかい}凌雲閣 西成郡下三番に在り、(後略)

五階 毘沙門堂の西に在り(後略)

⑥

明治三十三年(1900)

樋野亮一『大阪案内』(駁々堂)

凌雲閣^{アヰ}

北区北野ニアリ俗ニ九階ト称シ七層ノ高樓ニシテ諸人登臨ノ用ニ供ス其高百尺眺望快豁全市一眸ノ下ニアリ各所ヲ遊覽セントスルモノ此処ニテ其向位ヲ定ムル又一興ナリ

眺望閣

難波停車場ノ南ニアリ五層ノ高樓ニシテ高サ十八間方錐形ノ八角樓ナリ市人呼ンデ「難波ノ五階」ト云フ眺望又佳絶庶人登樓ノ用ニ供ス

商業倶楽部

南区今宮ニアリ宏壮ナル和洋館十数棟アリ本館ハ五階ニシテ難波ノ五階ト相並テ眺望亦佳ナリ庭中種々娛樂ノ具備ハリ一小園ヲナス来遊者多シ又近傍ニ動物園アリ

【資料7】

⑦ 明治三十七年（1904）

秋浦生『大阪名勝』（青木嵩山堂）

眺望閣（てうぼうかく）

旧御蔵の東方半町ばかり、こゝに五層の建ものあり、高さ十七間三尺、壁間に懸れる額は、大阪名家の題字を集めたるものとぞ、このあたりに第五回内国勸業博覧会の余興見世物開設せらる、近傍に又たパノラマ館あり。

凌雲閣（りやううんかく）

梅田停車場より東北三丁ばかり、北野茶屋町にあり、俗に九階と呼ぶ、九層の高閣にして、頂上まで二十七間といふ、その尤も上層に登れば、大阪二十万の人家は一眸の中にあり、閣を廻りて庭園あり、いづれも花卉に富む、近傍に鶴の茶屋あり、車茶屋あり、すこし離れて朝妻あり。

⑧

明治三十八年（1905）

坪谷水哉『日本漫遊案内 西半部』（博文館）

凌雲閣

梅田の北、茶屋町にあり。九層の樓閣直立すること二十二間。俗に九階と呼ぶ。楼上の眺望爽快なれど、何故にや近來頽廢して振はず。

⑨

明治四十一年（1908）

加藤紫芳『大阪案内』（矢島誠進堂）

凌雲閣

俗に北野の九階といふ元北野の鉄道線路踏切の北にあり入場金を徴して諸人の登閣を縦すこゝに登れば大阪市中を一眸の下に眺め心気頗る爽快なり園内に樹木茂りて所々休息所を設け来賓の需に依り飲食を供すこの近所に車茶屋といふがありて古より貸席を営むまた三番の入口に朝妻と云る貸ありて共に繁昌し居れり。

※翌四十二年（1909）版では「凌雲閣」は「毛馬開門」に差し替えられる。

⑩

浪花富士山の一枚刷（大阪歴史博物館蔵） 明治二十二年（1889）

大快観浪華富士の広告

芦が散る浪花の浦に名も高き生国魂の御社の其傍らに最と高く最と殊勝なる地を卜し大快観を開きたり世の諸君子よ聞き給へ其大略をしるすへし抑所謂ゆる快観ハさしも世界に及びなき駿河の富士を移し植へ浪花の富士と号けたり唐土人も称へにし蓬萊山を目のあたり見するのみかハ彌やさがに雲の上まで聳えたる其頂きに攀ち登る道のしるべとせしものハ童男童女も読み習ふ吾妻下りを写してぞ五十三次駅々に生人形を作りつゝ其情況を一々に現に見る如く示しけり斯くて雪ふる白妙の蓮の峯に登りなバ近き浪花ハ今更に言ふも中々愚かにて数十百里の景色まで東西南北隔てなく一眸の中に見渡しぬ遠くハ淡路播磨濁赤石の浦を漕ぐ船や海女の篝火色さへぎ紀伊の高野や山城の比叡の御岳に鳴る鐘も耳を貫くばかりなりさて又山の麓にハ四時に花咲く草や木の詠めに飽かぬ梅か香や牡丹菊水仙花柳桜もこき雑せて其種々を植へしなり今此山の開くるハ花の咲く春月の秋冬の朝に夏の暮無上無限の快樂を造化の小児と諸共に思ふまにまに尽すべき時来

【資料8】

りぬと謂つべし冀くハ諸君子よ聚ひ来まして月花に其精神を慰めつ海山と
共に久しき健康を保ち給へと懇ろに祈る吉日ハ明治廿二年の卯月初旬にぞ
ある